

青銅の祭壇に象徴されるイエシュアの十字架の死

ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての学びの第五回目です。今回は幕屋の入り口に入って最初に目にする「青銅の祭壇」(「ミズバハ・ハンネホーシェット」 מִזְבֵּחַ הַנְּחֹשֶׁת)について学び、そこに象徴されているイエシュアの十字架の上で流された血潮の力について考えてみたいと思います。



●「祭壇」はヘブル語で「ミズベアツハ」(מִזְבֵּחַ)、語根は「(動物をいけにえとして)ほふる」ことを意味する「ザーヴァハ」(זָבַח)で、「いけにえ」は「ゼヴァハ」(זֶבַח)です。主のために祭壇を最初に築いたのはノアでした。洪水後、「ノアは、【主】のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。」(創世記 8:20)とあります。その後、アブラハム、イサク、ヤコブと続きますが、祭壇でささげられたのは「全焼のいけにえ」でした。しかし、モーセの幕屋では、礼拝をするために門を通った者に求められた最初のことは、「罪のためのいけにえ」(新改訳)〔「罪祭」(口語訳)、「贖罪の献げ物」(新共同訳)、A sin offering(KJV)]をささげることでした。モーセの幕屋における「祭壇」の第一義的な必然性は、贖罪のためのものです。主にささげるいけにえの順序としては、「罪のためのいけにえ」(これには「罪過のいけにえ」と「罪のいけにえ」を含みます)の他に、「和解のいけにえ」と「全焼のいけにえ」もこの「祭壇」にささげますから、「いけにえをささげるための祭壇」と言えます。今回はこの「祭壇」に注目します。テキストの箇所は以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 27章 1~8節

- 1 祭壇をアカシヤ材で作る。その祭壇は長さ五キュビト、幅五キュビトの四角形でなければならない。高さは三キュビトとする。
- 2 その四隅の上に角を作る。その角は祭壇の一部でなければならない。青銅をその祭壇にかぶせる。
- 3 灰を取るつぼ、十能、鉢、肉刺し、火皿を作る。祭壇の用具はみな、青銅で作らなければならない。
- 4 祭壇のために、青銅の網細工の格子を作り、その網の上の四隅に、青銅の環を四個作る。
- 5 その網を下方、祭壇の出張りの下に取りつけ、これを祭壇の高さの半ばに達するようにする。
- 6 祭壇のために、棒を、アカシヤ材の棒を作り、それらに青銅をかぶせる。
- 7 それらの棒は環に通されなければならない。祭壇がかつがれるとき、棒は祭壇の両側にある。
- 8 祭壇は中をからにして板で作らなければならない。山であなたに示されたところにしたがって彼らはこれを作らなければならない。

1. 「祭壇」の形態

(1) 材料



- 「1 祭壇をアカシヤ材で作る。2・・青銅をその祭壇にかぶせる。」

とあるように、祭壇の材料は「アカシヤ材」に「青銅」をかぶせたものです。「アカシヤ材」はとても堅牢で、永生の象徴ともされています。幕屋における材料の木材は、庭の掛け幕を支えている柱を除いて、すべてがこのアカシヤ材です。しかもすべて青銅か金でおおわれています。

- 「祭壇」の場合、祭壇とその器具はすべて「青銅」をかぶせなければなりません。驚くべきことに、イスラエル人は鉄よりも固い青銅の製造を知っていたのです。「青銅」は金属の中で最も火に強いと言われますが、それは罪に対する神の怒りの激しさを示しているとも言えます。

(2) 「祭壇」の寸法とその寸法の数に秘められた象徴的な意味

- 「その祭壇は長さ五キュビト、幅五キュビトの四角形でなければならない。高さは三キュビトとする。」(新改訳改訂 3 出 27:1)とあるように、「祭壇」の寸法は長さ 5 キュビト、幅 5 キュビト、高さ 3 キュビトです。形としては、5 キュビト(45.6cm×5)、2.28m の正方形をしています。つまり、祭壇は「5」と「4」と「3」という数で成り立っていることとなります。それらの数はそれぞれ以下にのべるような象徴的意味を持っています。

① 「5」という数

- 幕屋において「5」という数字は神に対する人間の責任を象徴する数です。幕屋においては、この「5」とその倍数である「10」「20」「50」「100」という数がいろいろなところで使われています。たとえば、幕屋の庭の南北にはそれぞれ亜麻布の燃り糸で織られた 100 キュビトの掛け幕が張られ、それを支える 20 本の柱とそれを支える 20 個の青銅の台座。東と西はそれぞれ 50 キュビトです。「5」キュビト幅の掛け幕が 10 本の柱で支えられています。

- また「5」という数字は、「祭壇」の器具の数でもあります。

a. 「鉢」はいけにえの血をその中に入れて持ち運ぶためのもの。

b. 「灰を取るつぼ」は、灰を宿営の外にきよい所に持ち出すためのものです。このことが意味することは、イエシュアが十字架にかかった場所は「宿営の外」でなければならな



ったことと、イエシュアが葬られた墓も宿営の外にある、しかもだれの死体も置かれたことのないきよい「新しい墓」でなければならなかったことを示唆しています。

- c. 「火皿」は、熱い炭火を運ぶもの。
- d. 「十能」、および、e. 「肉刺し」は、いけにえを焼き尽くすための器具であり、神のみこころを執行するためのものと言えます。

●モーセの幕屋で規定されている「ささげもの」も「5」つです。

- a. 全焼のいけにえ(燔祭)〔任意のささげもの、自発的、香ばしい香り〕
- b. 穀物のささげもの(素祭)〔任意、自発的、香ばしい香り〕
- c. 和解のいけにえ(酬恩祭)〔任意、自発的、香ばしい香り〕
- d. 罪のためのいけにえ(罪祭)〔義務的、香ばしくない香り〕
- e. 罪過のためのいけにえ(愆祭)〔義務的、香ばしくない香り〕

※このうち、bを除くとすべて血を注ぎ出すいけにえですが、すべての人にとってきわめて重要なのは、dとeの二つです。なぜなら、血はいのちそのものであるゆえに罪を贖い(赦し)、人を神に近づけさせる力があるからです。

②「4」という数

●祭壇が四角形であるのは、「4」という数が四方、すなわち「キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになった」(1テモテ 2:6)とあるように、すべての部族、言語、国民、諸国、世々にわたるすべての人の贖罪のためであることを象徴しています。

●幕屋の入り口には、四つの撚り糸(青色、紫色、緋色、白色)で織られた幕があります。その幅は「4」の倍数である20キュビト。しかも4本の柱と青銅の台座が設けられ、だれでもこの門を通して入れることを意味しています。また、幕屋の本体をおおっている四枚の幕も全人類とかかわるキリストを表しています。

●ヨハネの黙示録では、ヨハネが見た御座のまわりには「四つの生き物」(獅子、雄牛、人、鷲)と「4」の倍数である「二十四人の長老」たちの存在は、多くの御使いとともに、あらゆる部族、言語、民族、国民の中から贖われた者たちを代表しています。新約聖書の中の四つの福音書もそれぞれ、マタイの「獅子」、マルコの「雄牛」、ルカの「人」、ヨハネの「鷲」を表しています。

③「3」という数

●ところで、「祭壇」の高さの3キュビトの「3」という数ですが、「3」は、父なる神、子なる神、聖霊なる神の三位一体に示されるように、完全な神のあかし、神の確証を表わす数字です。「キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神(御父)におささげになったその血は」(ヘブル 9:14)とあるように、「祭壇」の「3」キュビトの中に表されていると考えられます。

●以上、祭壇の寸法(5、5、3)とその形である「4」(四方)という数字だけでも、神が人とともに住むという

神のみこころの熱意が祭壇そのものに秘められているのです。

(3) 「祭壇」の構造

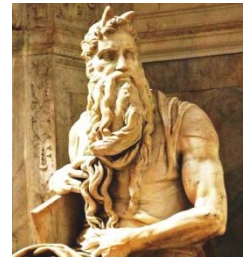
① 四隅にある「角」とその象徴的な意味

●27章2節に「その四隅の上に角を作る。その角は祭壇の一部でなければならない。青銅をその祭壇にかぶせる。」とあるように、青銅でおおったアカシヤ材の祭壇の四隅に作られた「角」は、祭壇の力を象徴しています。その「力」とは「血」の持つ力を意味します。祭壇の四隅にある四つの角に贖罪の血を塗ることで、あたかも神がご自身を求めようとする人の心に平安をお与えになることを示しているようです。

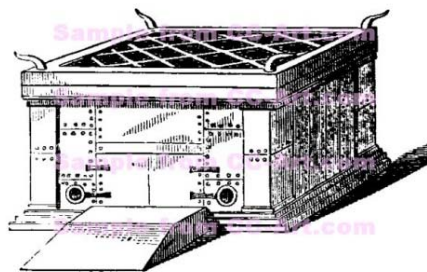


●「角」は上側と外側の方向を指し示していますが、それは血の力と勢いが、神に対してもまた全地の四隅にいるあらゆる人々にもあることを告げていると考えられます。

●余談ですが、「角」のことをヘブル語で「ケレン」(קֶרֶן)と言います。しかしこの「ケレン」の語源である動詞の「カーラン」(קָרַן)は「光を放つ」という意味です。モーセがシナイ山を下ると、モーセの顔の肌は光を放っていました(出 34:29, 30, 35)が、旧約聖書をラテン語に訳したヒエロニムスは、この箇所を「モーセの顔に角が生えていた」と訳しました。それを信じたミケランジェロは角が生えたモーセの像を創ったというのは有名な話です。



2. 祭壇のための被金(きせがね)とした青銅の火皿



●左図の祭壇を見ると、延べ板のようなものが張られているように見えます。これは青銅の火皿を打ちたたいて延べ板にしたものをかぶせたものです。このような指示は本来の幕屋建造にはなかったものでしたが、荒野において起こった出来事に基づいています。民数記 16章 37～38節参照。ここには、レビ族のコラとダタンとアビラムが共謀して指導者に反逆した事件が記されています。

●モーセはその反逆者たちとアロンとに、火皿を取り、それに香を盛って、おのおのその火皿を携え、会見の幕屋の入口に来るように告げました。地は口を開いて反逆者たちを生きながら飲み尽くしたのです。また、主のもとから火が出て、薫香を備えた 250 人を焼き尽くしました。そのとき、主はモーセに告げて仰せられました。「あなたは、祭司アロンの子エルアザルに命じて、火の中から火皿を取り出させよ。火を遠くにま

き散らさせよ。それらは聖なるものとなっているから。罪を犯していのちを失ったこれらの者たちの火皿を取り、それらを打ちたたいて延べ板にし、祭壇のための被金とせよ。これらをイスラエル人に対するしりとさせよ。」

●不信仰に対しては、神は第一世代の者に対して自然的な死をもたらしましたが、神の権威に対する反逆は神以外になし得ないさばきをもってはっきりと立ち向かわれます。案の定、権威に反逆したコラ、および彼と共謀した者たちはみな、地面が割れて「生きながら、よみに下る」という神のさばきを受けました。主はこの出来事を他の者たちの教訓的なしりととするために、共謀者らが神の前に近づくためにもっていた青銅の火皿を打ち延ばし、主の祭壇のための被金(きせがね)としたのです。



3. 青銅の祭壇に象徴される贖罪(身代わり)の諸啓示

●人間の罪のために動物がその身代わりとなるという啓示は、旧約聖書の中に啓示されています。その最初の啓示は創世記3章にあります。

(1) 「皮の衣」

●神は人を創造し、その人(アダム)をエデンの園に置られました。そのエデンの園の中で起こったすべての出来事はきわめてミステリアスです。つまり、創世記の1~3章におけるエデンの園でのすべての出来事には、神の救いのドラマのすべての要素が凝縮されています。つまり、神の似姿として創造された人間、神との親しい永遠の交わり、罪とそれによってもたらされた死の現実、と同時に、神のあわれみによる救いの福音がコンデンスされているのです。

●アダムが犯した罪によって呪われてしまった地は、刑罰的意味を持つ「いばらとあざみ」が多く生えるようになりました。「いばらとあざみ」に共通するのは「とげ」です。そのとげから身が守られる必要がありました。アダムがいちじくの葉をつづり合わせて作った手製の衣に代えて、神はアダムとエバのためになんと「皮の衣」を作り、着せてくださったのです。「皮」の原語は「オール」(עֹר)ですが、「衣」は「クットーネット」(כְּתָנִית)です。この衣はやがて大祭司や祭司たちが着る装束、また、ヤコブの最愛の子ヨセフやダビデの娘タマルに着せた長服を意味するようになります。つまり、特別に愛された者が着る長服、神と人との仲介的な務めをゆだねられた祭司たちの着る装束、これが「クットーネット」(כְּתָנִית)です。

●「着る」という動詞「ラーヴァシュ」(לְבַשׁ)には使役形(ヒフィル形)が使われており、「着せる、まとわせる、覆い隠す」という意味になります。この神の行為は墮落した人間を再び建て直すことを意味しています。特に注目すべきは、皮の衣を作るためには動物を屠って血を流す必要があります。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはない」と聖書にありますが、いのちの代価である血によって罪が覆われるということが「罪の赦し」なのです。つまり、神がアダムとエバに与えた衣は、血を流すことによって作られた「皮の衣」でした。これは、やがてキリストの十字架の贖いの血を信じるすべての者に与えられるキリストの義

を表しています。エデンの園でもそうであったように、それは神の一方的なあわれみによるものです。エデンの園で「皮の衣を着せる」という神の恩寵的行為は、新約では神の国のたとえの中に、また「キリストを着る」、「新しい人を着る」という表現で表わされています。

(2) 主が備えられた全焼のいけにえとしての雄羊

●創世記 22 章 2 節で「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを・・・全焼のいけにえとして・・・わたしにささげなさい。」との主の声を聞いたアブラハムは、躊躇することなく、翌朝早く、ろばに鞍を置き、献げる物(いけにえ)に用いる薪を割り、二人の若者とイサクを連れて、神の命じられたモリヤの山に向かって行きました(3 節)。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」と尋ねたイサクに、アブラハムは「神ご自身が全焼のいけにえを備えて(原文は「見つけて」)くださるのだ。」と答えます。そして主から指定されたモリヤの山の上で祭壇を築き、イサクをそこにおいてほふろうとしたとき、御使いによって止められました。そしてイサクに代わる一頭の雄羊が角をやぶにひっかけているのを見、それを取って全焼のいけにえとしてささげました。ここに「身代わり」の型が啓示されています。

(3) 罪のいけにえをささげる青銅の祭壇

●モーセの幕屋における青銅の祭壇は、贖罪の啓示においてきわめて重要です。出エジプト記 29 章にはモーセがアロンとその子らを祭司に任命する際に、次のことを主から示されました。

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 29 章 10～14 節

- 10 あなたが、雄牛を会見の天幕の前に近づけたなら、アロンとその子らがその雄牛の頭に手を置く。
- 11 あなたは、会見の天幕の入口で、【主】の前に、その雄牛をほふり、
- 12 その雄牛の血を取り、あなたの指でこれを祭壇の角につける。その血はみな祭壇の土台に注がなければならない。
- 13 その内臓をおおうすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓と、その上の脂肪を取り、これらを祭壇の上で焼いて煙にする。
- 14 ただし、その雄牛の肉と皮と汚物とは、宿営の外で火で焼かなければならない。これは**罪のためのいけにえ**である。

●祭壇の四隅にある「角」に、鉢の中に入れたいけにえの血を指で塗ることは、「罪のためのいけにえ」の血に限られています(レビ 4:25, 30, 34)。そして「罪のためのいけにえ」の血のみ、祭壇の土台に注がれました(出 29:12、レビ 4:7, 18, 25, 30, 34)。このことが初めて示されるのは、幕屋における祭司の「罪のためのいけにえ」について記されている箇所です。特に、祭司は「罪のためのいけにえ」について精通していなければなりません。それは神が人と共に住むためのきわめて重要な土台となる事柄だったからです。このように、まさに**祭壇は注がれた血の力の上に確立されていた**のです。

●身代りの血が祭壇の四隅にある角に塗られるだけでなく、その残りをすべて祭壇の土台に注がれるのはなぜでしょうか。どのような意味がそこに隠されているのでしょうか。以下の旧約の箇所は、いずれも、メシアについて預言されている箇所ですが、いずれもメシアのいのちである血が水のように「注ぎ出される」、「流

される」という概念が引き出されています。

① 詩篇 22 篇 14 節の「私は、水のように注ぎ出され」の「注ぎ出され(た)」は、「シャーパフ」(שָׁפַף)の 1 人称完了ニファル態(受動態)の「ニシュパフティ」(נִשְׁפַּפְתִּי)です。

② イザヤ書 53 章 12 節にある「彼が自分のいのちを死に明け渡し(た)」の「明け渡した」は、「アーラー」(הָעָרָה)のヒフィル態(使役態)の「ハエラー」(הִעָרָה)が使われていますが、これがニファル態で使われる場合には「注がれる、注ぎ出される」という意味になります。基本形では使われない動詞です。

③ マタイ 26 章 28 節「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」、マルコ 14 章 24 節「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」、ルカ 22 章 20 節「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」にある「流されるもの」で使われているギリシア語では冠詞付の「エックセオー」(ἐκχέω)の分詞受動態ですが、それをヘブル語に訳すとすべて、冠詞付の「シャーパフ」(שָׁפַף)のニファル態(受動態)の分詞「ハンニシュパーフ」(הַנִּשְׁפַּפְּהוּ)が使われています。つまりイエシュアの血は、多くの人のために「注ぎ出されたもの」なのです。

●「罪のためのいけにえ」の血は祭壇の四つの角に塗られ、その残りの血はすべて祭壇のまわりに「注がれる」か、土台に「流された」のです。「罪のためのいけにえ」の血は、やがて十字架の上(=祭壇の格子の上)で流されるイエシュアの罪のない尊い血潮を啓示していたのです。

①【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 10 章 19 節

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。

②【新改訳改訂3】ローマ 人への手紙5章9節

ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

③【新改訳改訂第3版】I ペテロの手紙 1 章 18~19 節

18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

●イエシュアの尊い血潮をたたえる賛美があります。

1. 罪 重荷を除くは 血の力 主の血は

悪魔のわざをこぼつ 奇しき力なり

力あるイエシュアの血 ほめよ ほめよ

力あるイエシュアの血 ほめよ 今ほめよ

2. 雪より白くするは血の力主の血は

罪のしみを抜き去る奇しき力なり

力あるイエシュアの血 ほめよ ほめよ

力あるイエシュアの血 ほめよ 今ほめよ

2016.3.27